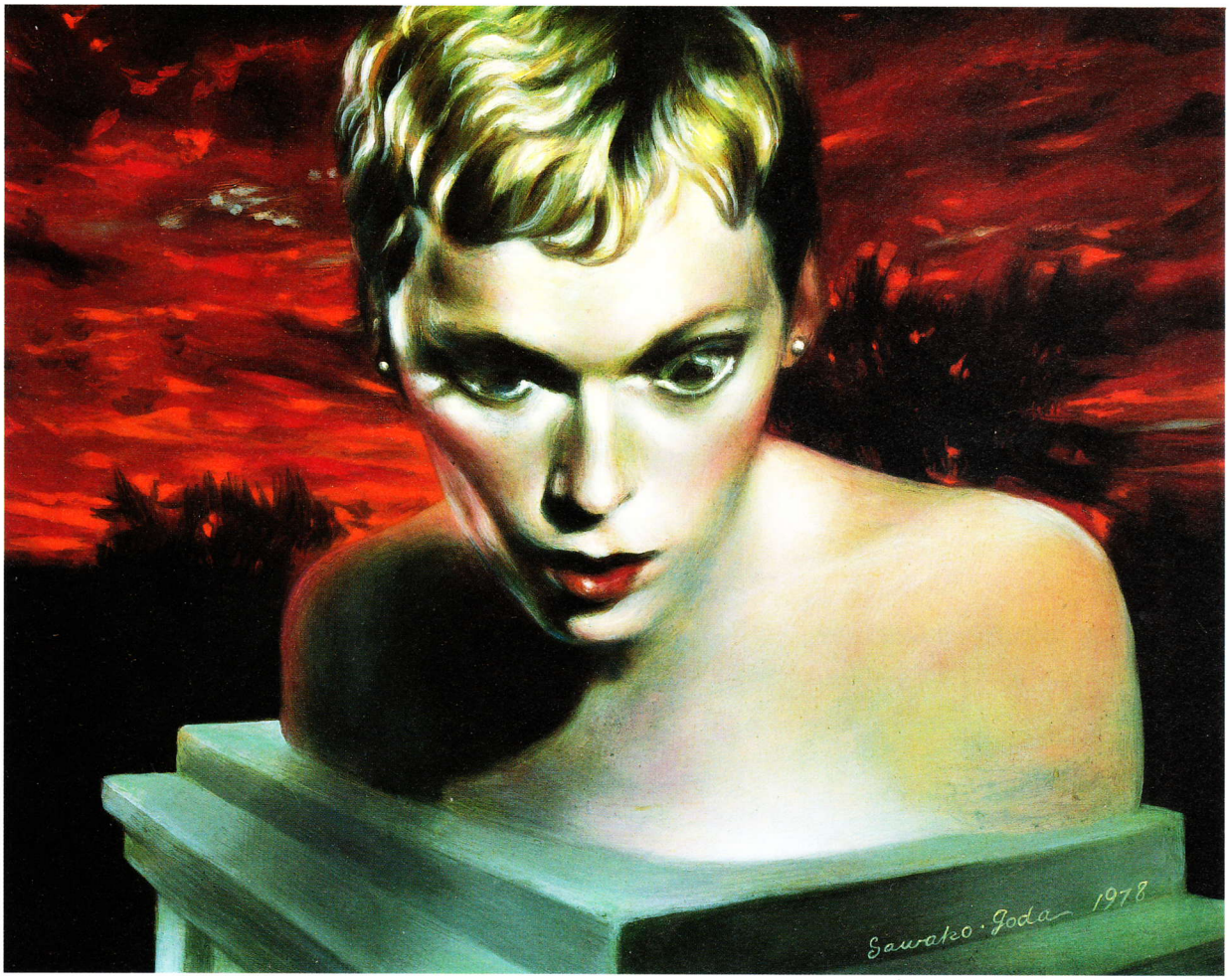


合田佐和子　怒りの日―バビロン　1978年

「女性の肖像 日本現代美術の顔」

images of women in japanese contemporary art 1930's-90's

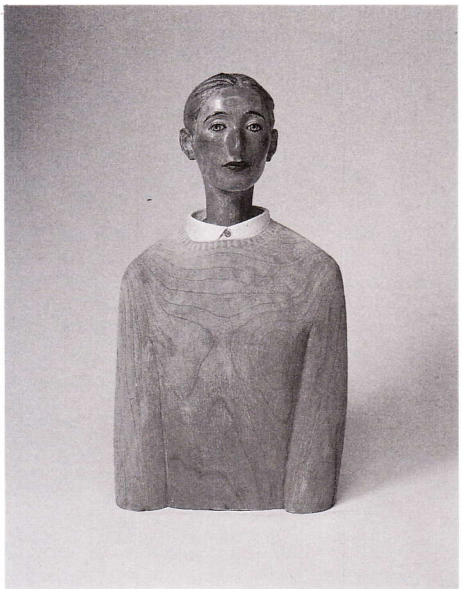
1996年12月10日(火)～1997年2月2日(日)

休館日:12月16日(月)、24日(火)、12月29日(日)～1月3日(金)、1月6日(月)、12日(日)、13日(月)、16日(木)、20日(月)、27日(月)

開館時間／午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)　入館料／一般200(160)円／小中学生100(80)円 ( )内は20名以上の団体料金

講演会
12月22日(日)午後2時より
「美人画はどこへゆく」
講師:田中日佐夫(成城大学教授)

渋谷区立松濤美術館
東京都渋谷区松濤2-14-14　TEL.03-3465-9421
井の頭線「神泉駅」下車徒歩5分、「渋谷駅」下車徒歩15分



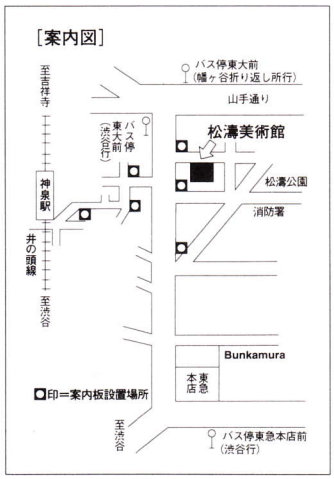
舟越 桂　冬の本　1988年
Photo:佐藤時啓

桂 ゆき　自画像(娘時代)　1985年
(千葉市美術館蔵)Photo:内田芳孝

桂 ゆき　婦人の日　1953年(宮城県美術館蔵)

森 緑翠　舗道　1948年

佐藤哲三　農村託児所　1934年(新潟県立近代美術館蔵)



渋谷駅下車徒歩15分／神泉駅下車徒歩5分

人の姿を描くことは、古来から続けられてきた、表現行為の基本です。日本の近現代美術においても、おびただしい人間像がつくられてきました。ところがそれらの圧倒的多数が女性像なのです。制作者の多くが男性であり、見る人を男性と想定する場合が一般的であるため、常に性的、美的な目的が裏打ちされていた、女性像に意識が集まりやすかったのかもしれません。

モデルをつとめてきたのは、ほとんどが美術家の親しい人物か職業モデルでしたが、何を描くかよりも、いかに描くかを重視しがちな美術界の空気の中で、彼女たちが誰であるかを問われないジャンルが成立しました。それは、造形的な探求を目的とする裸婦(婦人)像と、美術品の装飾的な機能を重視する美人画です。

しかし、人物像を表現上の思考や技法の面からでなく、どのような社会状況の中で、誰が、何をしている場面が描かれているのか、と改めてふり返ってみることもできるはずです。それは、それぞれの時代の女性たちの社会的な位置を示すと同時に、美術家たちが誰を選び新しい人間のイメージをどのように展開させてきたかをたどる作業にもなるでしょう。

本展では、1930年代以降の日本の「現代美術」のなかから、日本画、油彩画、版画、写真、立体の各ジャンルにわたり、美人画や裸婦像の範疇に入らない、約80点の女性像を展観します。戦前、戦中から現代にわたり、激動する時代のなかに風俗の変化と女性に対する意識の揺れをみると同時に、現代美術をひとつの側面から見直す機会となれば幸いです。

講演会

12月22日(日)午後2時より
「美人画はどこへゆく」
講師:田中日佐夫(成城大学教授)

美術相談

12月21日(土)午後2時より
佐藤善勇(洋画)　大和屋 巌(水彩画)
1月26日(日)午後2時より
宮田翁輔(洋画)　北尾和子(水彩画)

美術映画会

12月23日(月)午後2時より
世界、美の旅　ルノワール～世紀末の女たち～
ゴーギャン～野性へのあこがれ～
1月25日(土)午後2時より
ピカソ～若き天才画家～
セザンヌ～12通の手紙～